

新版補遺編

スリランカ学の冒険

庄野護

南船北馬舎

ワープロが火を噴いた 2

ジャーマン・レストラン 6

スリランカ旅行術 11

「新版補遺編」は『スリランカ学の冒険』の初版（1996年4月）から新版（2013年7月）への改訂作業におきまして収録できなかった3編をまとめたものです。自由にダウンロードしてお読みいただけます。ご利用くださいませ。

ワープロが火を噴いた

旧ソ連のモスクワでは、しばしば家庭用テレビが火を噴いた。スリランカのコロンボでは、ワープロが火を噴いた。

白い煙がボツと立ちのぼった。次の瞬間に青い炎が見えた。ほんの一秒足らずの出来事だったが、受けたショックは大きかった。新品を東京から持ち込んで半年と経っていない。保証期間中の故障なので、日本ならサービセンターに持ち込んで何とかできたかもしれない。しかし、日本でワープロが火を噴くことはめったに起きないだろう。だが、スリランカならとくにめずらしくもない。冷蔵庫さえ火を噴くことがある。

日本製の一〇〇ボルト仕様の冷蔵庫は変圧器を使っても弱い。もともと電圧の変化を想定して設計されていない。電圧変動の許容範囲はせいぜい一〇％。スリランカの電圧変動はこの許容範囲をはるかに超える。ここではせめて使用者自身の許容範囲を広げておかないと電気器具の故障から身がもたなくなる。

で、火を噴いたワープロだが、スリランカで修理のきくような故障ではない。あきらめるしか

い。スリランカ人の友人の子供にあげてしまった。免許をやつと取得して父親のオートバイに夢中の彼なら、壊れたワープロを分解して楽しむにちがいない。

ワープロが火を噴いた原因は二つ考えられる。

塩害と電圧。

海岸線から五〇メートルと離れていない場所に部屋を借りている。二階建て家屋の一階部分で、階上には五人家族の大家が住む。波打ち際まで、三、四軒の家が立ち並ぶ。家の軒はみな低い。防風林もない。五月から一〇月にかけての南西モンスーン期には潮風が二四時間吹きつける。ベトツとした潮風は部屋の隅々にまで入り込んで来る。窓を閉め切つても防げない。南西モンスーンのこの期間、海に面する西側の窓は開けられない。フィルムもカメラも注意しなければカビだらけとなる。車も車庫に毎夜入れて管理しなければ一年で錆びつく。家の中の台所用品でさえ、ちよつと油断すれば錆がつく。当然、電気製品もやられる。で、ワープロが火を噴いた。

二、三日前から変圧器がチリチリと音をたてていた。さきに変圧器が壊れて、一〇〇ボルト仕様のワープロ本体に二三〇ボルトの電気が流れこんだのかもしれない。日本語ワープロは日本での使用を前提に生産されている。当然、一〇〇ボルト仕様だ。ワープロにかぎらず、日本で使っていた電気製品をスリランカで使用する際、電圧を半分に下げる変圧器を使う。「電源降圧トランス」と呼ばれるものだ。デパートの旅行用品売り場などに行くと、二、三種類置いてある。最近では改良が進み、入力電圧の大小にかかわらず一定の出力電圧が確保されるようなものもある。小型になつてき

ているのがうれしい。一九八〇年頃まで機能の良いものは驚くほど重く大きかった。旅行カバンに入れて持ち運べるようなシロモノではなかった。特別に梱包して保険付き別送貨物として送る必要があつたくらいだ。今では小さく便利になった。しかし、私のワープロはかえつてこない。

スリランカの電圧は二三〇ボルトということになっている。だが、それが曲者なのだ。電圧の変動を小さくする電圧安定器（スタビライザー）の目盛りの動きを読み取るかぎり、コロンボの電圧は二一〇ボルトから二五〇ボルトのあいだを自由に行ったり来たりしている。コロンボから離れて地方へ行くと変化がもつと激しい。二〇〇ボルトから一気に三〇〇ボルトに跳ね上がった。そんな場所では保護装置を二重、三重に付けておかないと、高価なコンピュータも一カ月でお終いになりかねない。

送電線に落雷したときが危ない、と聞いたことがある。音も聞こえないほどの遠くの落雷で電圧が跳ね上がり、電気製品が火を噴くとしたら、この話は本当かどうか。ともかく、雷の音を聞いたから電圧の変化に弱い器具のプラグを外すことだ。ファクス機やコピー機も危ない。

コロンボにある知人の職場には中型コンピュータが複数ならんでいる。コンピュータ一台ごとにそれぞれ「スタビライザー」「スタボール」という保護装置を二重に付属させてある。コンピュータの周囲はひとが転びそうなほどの配線だ。ここでは、ひとの安全よりもコンピュータの安全だ。

この場合、スタビライザーで電圧変動を小さくしておいて、次にスタボールで確実に電圧を下げる。スタボールは電源降圧トランスの高級機である。こうしておいても「壊れるときは壊れる」らしい。

そして、コンピュータ本体が壊れたときは、「お終い」なのだそう。それでも、ときには保護装置が頑張つて、瞬間三〇〇ボルトの異常高電圧に自らを犠牲にして本体を守りぬくこともある。コンピュータ本体が壊れることを考えれば、二種の保護装置など安いものだ。

二つとも使用に耐える製品がコロンボで売られており、買った店で修理もきく。一万円とか二万円の値段で保護装置が買えるにしても、なぜそんな出費が強いられるのか疑問が起きる。そもそも電圧に関して日本は特別な国なのだ。交流一〇〇ボルトを採用している国は世界一六五（もしくはそれ以上）ある国のなかで日本だけである。つまり日本の電圧は世界一低い。

二三〇ボルトのスリランカは、むしろ世界の常識に近い。世界では二二〇ボルトの国が八〇カ国あつて最大多数。次がスリランカと同じ二三〇ボルトの二四カ国。百二〇カ国以上が二二〇〜二四〇ボルトの電圧を採用している。だから、二四〇ボルトのオーストラリアからスリランカに來たひとは、本国から持ってきた家庭用電気器具をそのまま使える。変圧器をもつとも必要とするのは海外に出る日本人なのだ。軽量になつてきたとはいえ、変圧器は旅行の友には重過ぎる。そんな不便な器具を持つて海外に出なければならぬ日本人はどこか変である。

参考

山根一眞「電源問題と貴闘力問題」『週刊文春』一九九一年二月五日号所載

ジャーマン・レストラン

ヌワラエリヤでスリランカの薬草を研究している日本人女性研究者から電話があつた。今、列車でコロンボの駅に着いたばかりだという。夜の八時にちかい。朝の九時前には住み込んでいる村を出発していたはずだ。本来なら夕方明るいうちに着くバドッラからの急行列車が遅れたのだ。

最近、毎日のように遅れていると聞く。大雨で山崩れが起きて不通になることもある。でなくとも保守管理の悪い線路で不意の脱線事故が起きたりする。加えて、理由のない遅れもある。きょうは雨のせいらしい。が、そのことよりも食事の誘いだ。こちらは夕食の準備の最中だというのに。

「二〇分後にジャーマン・レストランで」

当方の返事も確かめずに電話が切れた。駅前の民営郵便局からの電話に違いない。公衆電話のまだ少ないスリランカ。場所にもよるが、電話探しはけっこう難しい。近くの商店や事務所で電話が借りれないとき、「プライベート・ポスト・オフィス」と呼ばれる民営郵便局を探すことになる。この時間、商店は終いかけている。おそらく電話を二、三台置いただけの二四時間営業の小さな民営郵便局で、順番を待つての電話なのだろう。海外出稼ぎ者の多いスリランカでは、国際電話のかけ

られる郵便局の電話はこの時間かなり混んでいる。

フォート駅からなら、バジャジ（三輪自動車）のタクシーで一〇分三〇ルピー。バンバラピティアの私の下宿からだとい五分四〇ルピーで目的のレストランに着く。二〇分後という時間の計算に感心する。

酒を飲まない女性だ。そのひとが酒場の雰囲気のレストランを指定してきたのは、話相手が欲しいのだろ。彼女なら「ひとりで食べてもおいしくないから」と理由づけするかもしれない。ヌワラエリヤでは、おもにシンハラ語だけで暮らしている。寒い日がつづくと風呂にも入れない。なにしろ標高二〇〇〇メートルなのだ。しかも、スリランカでもっとも雨の多い地方。コロンボの私の暮らしとは比較にならない。

私の都合は単純だ。たまには生ビールも悪くない。一年じゅう暑いコロンボなのに生ビールを出す店はわずかしかない。なかでも客の回転がよく、いちばん新鮮な生ビールを出すのがジャーマン・レストラン。スリランカ在住の日本人には「ジャーマン」の名で通用する。が、タクシーの運転手にはわかってもらえないこともある。そのときは、「ゴール・フェイスホテルの近く」と指示する。

ドアマンに迎えられてレストランに入る。外はじゅうぶんに暗かったが、中はずっと暗く感じた。スリランカ人は、視力が良くて薄暗くても見えるようだ。遠目もきく。どこのレストランも、私の目には暗い。

軽音楽のテープが響くフロアーの周りを数人掛けのテーブルが並んでいる。小学校の教室の広さ。

椅子もテーブルも自然木が使われていて落ちつきがある。太い柱をはさんで二人掛けのテーブルが一对。おそらくそこだろうと予想したとおり、待ち人は澄ました顔でタバコを吹かせていた。

スリランカに來た頃は肩まであつた髪がいつの間にか短くなつてゐる。自分の注文は済ませたらしい。挨拶を交わして、顔を覗き込む。疲れた表情だが、触れないのが礼儀だ。いつものように、赤いリュックサックが椅子の横に寝かせてある。重い荷物だ。中身は日本語の本でぎつしり。コロンボに下りてくるたびに知人の家から本を借りてゆく。私なら返しにいくのが面倒なので借りないが、まめな植物学者は持てるだけの本を担いで山に戻っていく。

赤いベストの従業員が私のオーダーをとりに来た。このウェイターたちは、みな背が高くがちりしている。そして、事務的に注文を聞いてくれる。ふつうのことなのだが、スリランカではめずらしい。ほかのレストランでは注文どおりに料理が來たら「ラッキー」。そのうえシンハラ語で会話に應じたりしていると、どちらが客かわからなくなる。事務的に事が運ぶというのは、スリランカではありがたいことなのだ。

なにしろ、コロンボの平均的レストランには不慣れな従業員が多い。三カ月ぐらいして慣れた頃には、プロのウェイターとして外国のホテルなどに出稼ぎに行つてしまう。だから、コロンボのレストランのサービスはいつまでたつても良くならない。そんななかでジャーマンは数少ない例外の場所。従業員の入れ替わりが非常に少ない。チップ収入が多いのだろう。生ビールの小ジョッキーとオムレツを私は注文する。

このレストランは味も値段も申し分ないのだが、量が多い。ついつい食べすぎてしまう。でも、

それは私の胃の事情で、ヨーロッパ人の客たちは、私なら食べきれない肉料理のメイン・ディッシュに加えて、前菜、スープ、パン、デザートと私の三倍は平らげる。

ヌワラエリヤでおいしいスリランカ料理を食べている植物学者は、ドイツ風味の肉料理を懐かしそうに食べはじめた。仏教徒の村の農家に下宿している彼女にとつて、村で牛肉を食べる機会はまづない。月に一度か二度、肉料理が出されても山羊か猪の肉だろう。しかし、肉は使用しなくても、田舎のスリランカ料理はおいしく、飽きることがない。コロンボのレストランの料理なら、評判の良いものでも毎日食べられない。経済的な理由ではなく、毎日食べたいと思うほどの食欲がわかない。そのように植物学者は、料理を飽きる料理と飽きない料理に分類してみた。瓶入りのレモネードを自分でグラスに注ぎながら。

私はファームオムレツの分量のためにその半分しか食べられず、二杯目の小ジョッキも飲み干せるかどうか疑わしい。九時を過ぎて店は混んできた。が、空席を待つ客を気にすることはない。食事の時間をじゅぶんにとる習慣で、座席はせいぜい二回転。このまま閉店の一時まで居すわつてもかまわない。しかし、一〇時を過ぎると、酔った客とたちこめるタバコの煙で雰囲気が変わってしまう。扁桃腺の弱い私は空気の汚れが気になってくる。

「毎日、シタールを練習しているのよ」

農家の婦人である下宿のおばさんや子供たちが、田舎ではめずらしいシタールの音に耳をかたむ

けている様子が浮かんでくる。シタールは、植物学者がスリランカに来てから習いはじめた楽器だ。ピアノもバイオリンも弾く彼女はわずかの期間に人前でプロと共演するほどに上達した。いつぽうで、本業の研究論文も二本目を書き上げようとしている。もちろん、英語で。このひとに会うといつも残念に思うのは、その才能を一つ分野に集中すればかなりのものになるのに、ということだ。ビールに酔ったのか、いわずもがなのことを口にしてしまった。返ってきた視線は私のことばを非難していた。会話が途切れたところで、ウェイターを呼んで会計をしてもらおう。

レストラン前の路上にはいつも同じバジャジのタクシーがたむろしている。シンハラ語で掛け合う客にはふっかけたりはしない。運転手は上機嫌でシンハラ語でしゃべりかけてくる。

「どこからきたのか」「どうしてシンハラ語がしゃべれるのか」。植物学者は村人を相手にするようにていねいに答えている。毎回、同じ質問と答えのやりとりに私は参加しない。エンジンの音に負けまいと、ふたりともかなりの大声になっている。ドアのないオープンカーなので、風通しは良すぎるくらいだ。夜が深まって、気温は下がってきている。が、冷房のレストランにいたせいか、さつきまで引いていた汗が少しずつ吹き出してくる。車は最大速度で走っている。私はポケットに手を入れてタクシー代の小銭をさぐりはじめた。

スリランカ旅行術

ときおり政治家の暗殺や爆弾事件が起きて、スリランカは不名誉な旅行自粛地域の指定をうける。そのたびに日本の大手旅行代理店はツアーを軒並み中止する。事件の発生が六、七月に多いので、夏休みの家族旅行がキャンセルになってしまう。そんなこんなで、いまだスリランカ旅行が実現できない知人家族がいる。

「去年、キャンセルになったから、今年はインドネシアに行く」

と手紙が届いた年は、何の事件も起きない。

「今年は三年ぶりに企画してみました」

その年は、爆弾事件で旅行自粛。彼らにとつてスリランカはアフリカより遠い。

「そんなに荒れているのでしょうか」

届いた手紙の行間にはそんなはずはないと思いが読み取れる。

今も内戦が続き、首都では爆弾事件が起きる。そんな国を安全だといえば、ウソになる。けれど

も注目したい事実がある。外国人が事件に巻き込まれる確率が非常に低いこと。この点がほかの内戦の国々と違っている。過去のベトナムも現在のレバノンでも外国人は標的にされ、外国人の集まる場所に爆弾が仕掛けられた。しかし、スリランカはそうではない。外国人観光客を狙った犯罪の少ない国だ。この国で外国人観光客が民族紛争に巻き込まれる確率は、交通事故に遭う確率よりも低い。

また、日本人であることを理由に襲われることはない。植民地時代の名残りで反英感情はたまに見る。だが、スリランカは世界一の親日国だ。日本人には安全な国といえる。ひとつの証拠がある。それは、最近の十数年間、交通事故をもふくめた日本人の事故が非常に少ないこと。ほかのアジアの国々と較べると、事故の少ない国のトップにランクされている。内戦の国なので気のゆるみが少ないのかもしれない。

何か事件が起きたあとならスリランカのファイブスター・ホテルは世界一安い宿泊料金となる。ジャカルタやシンガポールでは二〇〇米ドルもするホテル代が六〇米ドル以下に下がる。そのときが旅行のチャンスといえるかもしれない。

とはいっても、注意は必要。気づいたことをいくつかメモしておこう。

カトナーヤカ国際空港

スリランカの空港で民間機が乗り入れているのはここ一カ所だけ。コロンボ空港と呼ばれることもあるが、公式名はカトナーヤカ国際空港。コロンボ市の中心から車で約一時間の距離にある。飛

ばせば四〇分（一九九五年より公式名は再びバンダラナーヤカ国際空港となった）。

日本からはエア・ランカ（現在はスリランカ航空）が成田と福岡から直行便を飛ばしている。

シンガポール航空は、シンガポールからコロンボに週五便運行している。これに乗り継げば、成田、名古屋、大阪からその日のうちにコロンボに到着できる。

一日で行けるスリランカだが、エア・ランカもシンガポール航空もコロンボ到着は夜遅い便となる。バンコクから明るいうちに到着していたタイ航空のコロンボ便も最近は夜の便になっている。心配なひとは現地の旅行会社にはファクスして迎えを頼んでおけば安心。その際、一泊目だけ中級クラスのホテルに予約をいれておけばさらに安心。

入国審査のとき、出国の航空券をもっていれば一カ月の滞在許可がその場で簡単にもらえる。税関の荷物検査も大きな荷物でないかぎり日本人観光客はフリー・パス。

カトナーヤカ空港には到着ロビーにも免税店がある。お酒やタバコのお土産は到着してからでも買える。

到着ロビーには三つの銀行が二四時間営業の両替所を開いている。レートは市内の銀行と同じ。ホテルのレートよりも良い。

両替していると、「タクシーはどうか、ホテルは決まっているか」などと客引きが言い寄ってくるかもしれない。なかには身分証明書などを見せて正規の職員を装う男もいる。気に入らなければきっぱり断わり、観光案内所を利用したい。広くないロビーだから案内所はすぐ見つかる。安宿、車の手配も可能。

安宿から高級ホテルまで

タクシーよりもバスを体験したい旅人は空港ビルを出て北に向かって三〇〇メートルほど歩く。出発や迎えの車がやってくる反対の方向に歩いていくと、民営の中型マイクロバスが見えてくる。

コロンボ市内まで約一〇ルピー弱。小銭を用意しておきたい。バス料金はタクシー代の一〇〇分の一（空港ビル前の交通規制は頻繁に変わるので、到着時に案内で聞くといい）。

コロンボのバスターミナルに着いたら、次に乗るバスを探す。デヒワラ地区の安宿街にはモラトウワ行きに乗る。三ルピー。この乗換えには三〇〇メートルくらい歩く。バスターミナル周辺にいるお巡りさんに方向を聞けばよい（バス停の再編もはげしいので注意）。

コロンボ市内の安宿で、安心・清潔で人気があるのはコロンボ第二地区のレイク・ロッジ。レストランもある。一泊約一五ドル。

女性のひとり旅でも安心なのはコロンボ第四地区メルボルン・アベニューのオッターリー・ツアーリスト・イン。二階建ての一〇室足らずの小さい宿。朝食付きで約一五ドル。

安宿についての詳しい情報は市内オベロイ・ホテル前の観光案内所で。民宿のリストもある。

中級ホテルの代表格は、コロンボ第三地区にあるレーヌカ・ホテル。カーペットも家具もファイブスター並みとはいかないまでも部屋代の値打ちはじゅうぶんにあるホテル（約五〇ドル）。日本からファクスや電話で直接予約も可能。

日本食レストランのある高級ホテルは、ヒルトン・ホテルだけ。

ホリデー・インは外観の見栄えはしないが、部屋の広さと内装で、ホテルを知るひとには人気がある。生ビールが飲める「ジャーマン・レストラン」も歩いて二分。日本食レストラン「日本橋」には歩いて三分。タージ・ホテル、ゴールフェイス・ホテルも同時に利用できる距離にある。

そのほかの高級ホテルには、インターコンチネンタル・ホテル、オペロイ・ホテルなどがある。コロμπο市内にあるすべての高級ホテルが満室になることはまずない。だから、いつも部屋代のデイスカウント戦争が続いている。ふつう現地の旅行社へのデイスカウントしかしていないので、旅行社を通したほうが安く泊まれる。

本屋さんでの本の購入方法

スリランカの本屋さんは、はじめてのひとにはちよつと手強い。

大きな本屋さんで本を買うとき、次のような手続きが必要になる。

- 一、買いたい本を受付に持っていくて伝票をきってもらう。本はその場でもらえない。
 - 二、その伝票を持って、会計係のカウンターに行っておカネを支払い、領収書を受けとる。
 - 三、本の引渡カウンターに行つて、領収書を見せて本をもらう。
- さらに、出口で再度のチェック。

フォートの駅前にあるグナセーナ書店では、二階で見つけた本なら二階の事務員に伝票を書いてもらい、階段下の会計でおカネを支払い、出入口近くの引渡カウンターで本を受けとる仕組みになっている。

このシステムにはたいがいひとが戸惑う。

さらに戸惑うのはホテルの本屋さん。写真集などの高価な本を透明プラスチックで包装していて、内容を確かめられない。

「おカネを支払えば、中身が見られますよ」といわれて憤慨する観光客がいる。

街角で見かける「ブック・ショップ」の看板は文具店のこと。ブックとは、この場合ノート・ブックのこと。

コロンボ市内にある書店の代表格は、トランスアジア・ホテル（旧ラマダ・ホテル）ななめ前のレイク・ハウス書店。シンハラ語の教科書から、スリランカに関する英文の本、オリジナルの絵ハガキと、何でもそろう。

これと思った本はその場で買うのがスリランカの流儀。そうしないと同じ本に二度と出会えないかもしれない。

夕日を眺めながらビールを飲む法

夕日の名所は、ゴールフェイス・グリーン。

タージ・ホテル前の広場。茶色い土の露出した広場がなぜ「グリーン」と呼ばれるのか疑問を持つともいるが、三〇年前までは芝目のつまった美しい緑であったそう。利用者が多くなつて、保守管理が間に合わなくなつたらしい。昔の面影がなくなりつつあると嘆くひともある。

しかし、広場は毎年賑やかになっている。二四時間、人影が絶えることがない。ここで朝を迎え

る恋人たちや酔っぱらいも多い。空が白みかけるころには、早朝の散歩やジョギングの人たちがやってくる。わざわざ、運転手付きの高級車で散歩のためにやって来るひともいる。

とはいっても、ゴールフェイス・グリーンは、夕暮れ時がいい。

けれども、ここで夕日を見ながら缶ビールというわけにはいかない。スリランカでは、女性や子供の面前でアルコールを飲むのはタブーとされる。そんな法律はないのだが、慣習は時として法律よりも強い規範となる。列車の中で缶ビールを飲むようなひともスリランカにはいない。

ビールを飲むのは、お隣のゴールフェイス・ホテルのテラスとなる。

午後五時過ぎに出かけよう。ビールを二本飲む予定のひとも、とりあえず一本だけ注文する。三〇度を超える外気は冷えたビールを瞬く間に生ぬるくしてしまう。

愛想のよいウェイターは輸入物のハイネケンを勧めるかもしれないが、地元のライオン・ピルスナーでじゅうぶん。スリランカ産カルスバーグもある。

スリランカのビール生産の歴史はアジア最古のもののひとつ。高地ヌワラエリヤの芳醇な水で仕込まれたビールはスリランカの味がする。

オートリキシヤの利用術

西は中東から東はインドネシアの島々まで軽タクシーとして使われているのが、バジャジというインド製の三輪自動車（オートリキシヤ）。スリランカではスリー・ウィールとも呼ばれる。

ある本に「オートバイを改造したもの」と書いてあるのを読んだことがある。一二五ccのエンジ

ンが動力なので、そんな誤解が生まれたのかもしれないが、バジャジはインドの工業都市プーナで生産される世界のベストセラー車である。世界の名車といってもよい。燃費効率と機動性にすぐれ、これにまさる小型輸送車はいまのところ見当たらない。バジャジは、二一世紀になっても生産がつづくという意味で、未来の車でもある。

で、その利用法。

運賃メーターを取り付けたものもあるが、値段は交渉して乗るほうが安い。非公式だが、現実には二種類の値段がある。

一、外国人観光客料金（たとえば、三キロ一〇〇ルピー）

二、ローカル料金（たとえば、三キロ五〇ルピー）

およそ倍の値段差がある。これでも、一〇倍以上の差がある国と較べれば民主的値段といえる。

ホテルの周辺にたむろしているタクシーよりも流しのバジャジが安い。まず手を挙げて停める。そして値段の交渉となるが、最低限の英語は通じる。

タージ・ホテルからバンバラピティア地区の南インド料理店バナナリーフに行くとする。

「一〇〇ルピー」と運転手は最初に言う。

それに対してはじめての利用者なら、

「では、八〇ルピーにしてください」と言うだろう。

運転手は難しい顔をつくつて、

「それじゃあ、九〇ルピーで行きましょう」と言いなおす。

利用者は、少し安くなったからまあいいやと思つて交渉妥結となる。これでは運転手側の完全勝利である。

少しでも安く乗るコツは、ひとから相場を聞いたりして自分の基準を持つこと。そして、「五〇ルピーで目的のレストランにいくのだ」と断固主張すること。そのときの態度がいちばん重要。高ければ乗らないという素振りを見せることがかなり有効に作用する。

気をつけたいのは、運転手が行き先を理解しないまま出発してしまう場合。そうならないようホテルの従業員などに頼んでシンハラ語で行き先を書いたメモを用意して出かけるのも一案。

最近では、電話一本ですぐ迎えに来てくれるラジオ・カー・タクシーも増えてきた。こちらは値段を交渉する必要はない。メーター制で値段も高くない。夜、出かけるときはこちらが安全。

バスは始発から乗る

長距離バスも市内バスもスリランカのバスは混んでいる。一九八〇年代後半当時、途中のバス停からは素手でも乗り込めないほどだった。長距離バスは定員の三倍を超える乗客を乗せて走つてた。その混み様が旅の疲れとなつて残つた。荷物のあるときはさらに大変だった。リュックの留め金でほかの乗客を傷つけたこともあった。

しかし、今は昔。だいぶ改善されてきた。とくに民営バスのサービスは毎年向上してきている。キャンディ、アヌラダプラなどの主要な観光地へは、冷房付き急行バス「インター・シティ」が登場した。いまだ中古のマイクロバスが主流だが、比較的新しい中古で乗り心地は悪くない。もち

ろん、日本車だ。しかもこの急行バスは速いわりに料金は高くない。

急行バスの出現でこれまで六時間以上かかっていたコロンボ・ヌアラ・ダプラ間が四時間以内に短縮された。だが、この急行バスに乗り込むときは度を越した冷房に注意したい。ガンガンと最大出力でかかる冷房とラジオの音楽に失神しかねない。ある日本人女性観光客は冷房を弱くするように車掌に頼んだ。すると、ほかの乗客から苦情が出て論争となった。とうとう最後には、彼女ひとり途中下車するはめにおちいった。

そのように降りる場所は自由に選べる急行バスだが、乗り込むときは始発のターミナルからしか乗れない。が、予約ができる。一般の長距離バスは最寄りのバス停からでも乗り込める。しかし、どちらのバスを利用するときも、始発のターミナルから良い席を確保して出かけたい。その方法が安全で疲れも少ない。

スリランカのバスには女性専用席がある。女性のひとり旅なら、たとえ妊娠していなくても妊婦用の席かその周辺に席を取ろう。ただ本物の妊婦が乗り込んで来たときは席を譲りたい。気をつけなければならないのは、運転手の後ろの席。そこは僧が乗ってきたときは譲らなければならない席だ。僧は女性に触れてはいけないので、気遣いが必要だ。隣合わせに座ったりしたら、周囲のひとが騒ぎだす。しかし、間違っても最後列の隅の席にはいかないこと。スリや痴漢に襲われやすい。

デイベックは手に下げる

人込みの路上、混んだバスの中などではバッグは手に持たない。三人組、四人組のスリに囲まれ

てバッグを剃刀でスパッと切られることがある。彼らは、押す人、切る人、盗む人、取ったものを受けてつて逃げる人、と分業している。被害に気づいて犯人が特定できても、盗品が出てこなければ告訴できない。

「スリ」の集団に囲まれたときは刃物に注意したい。下手な抵抗はケガのもと。万が一被害に遭ったら、最寄りの警察署に届けよう。もし、どうしても取り返したい品物があつたなら、そのことをくりかえし訴える。ある被害者は、愛用の眼鏡があきらめきれないと英文の嘆願書を提出していった。すると二日後、その眼鏡だけが届けられた。関係者がスリの元締めに話をつけて取り返してくれたという。ただし、スラれた現金はあきらめよう。そういうときのために、トラベラーズ・チェックがある。

五〇ルピー札をじゅうぶんに持つ

儉約する旅で地方に行くとき、銀行で五〇ルピー札に両替してから出かけた。五〇ルピーを日本円に換算して一〇〇円少々と軽く考えるのは間違いだ。なにしろ、五〇ルピーあれば二ルピーのプレーンティーが二五杯、飲める。お茶二五杯ぶんの値打ちと見るなら、青い五〇ルピー札は一〇〇円札をはるかに超える価値がある。

さて、田舎の茶店（ティー・カデー）でお茶代の支払いに緑色の一〇〇〇ルピー札でも出そうものなら大騒ぎになる。赤色の一〇〇ルピー札でも釣り銭がそろわない。ときには、お釣りが無いといわれる。そこでちよつとかさばりはするが、五〇ルピーの札束を持っていれば釣り銭のトラブルは避

けられる。バス料金も雑貨店で石鹸を買うときもスムーズに支払いできる。旅の安心は、五〇ルピ
ー札から。

レスト・ハウスは泊まり得

ポロンナルワの湖畔の辺り。最高のロケーションに建つレスト・ハウス。公営のホテル・コーポ
レーションが経営している政府系レスト・ハウスで管理が行き届いている。白いサロマのおじさん
の「ボーイ」がていねいにサービスしてくれる。時間が足りないときは、昼食やお茶だけでも寄っ
てみたい。スリランカ料理のフルコースが手頃な値段で食べられる。

マレーシアやスリランカなどの旧イギリス植民地国のレスト・ハウスは、泊まり得の宿泊施設と
いえる。もともと役人の出張用宿泊施設として建てられたもので、一般国民や観光客は利用できな
い時代があった。スリランカでは馬車の走行距離を基準にレスト・ハウスが置かれたという。つま
り、レスト・ハウスから次のレスト・ハウスへはお茶の時間までの距離となる。ここまでこだわっ
たイギリス人はたいしたものだと思う。

現代のスリランカを車で移動する旅でも、レスト・ハウスでの休憩がおすすめだ。クルネガラ
湖（溜め池）に面したレスト・ハウスは、ポロンナルワやシーギリアに行く人たちの休憩によく利
用されている。緑ゆたかな景色に囲まれて、小鳥のさえずりを聞きながらていねいにいれた紅
茶を飲むと疲れも消えてゆく。

また、地方のレスト・ハウスはバス旅行時のトイレ休憩にも利用できる。実際のところ、旅行者

が利用可能な公衆便所はとても少ない。それと、レスト・ハウスは女性のひとり旅でも安心して泊まれる。

道路地図にはレスト・ハウスのある場所に印がついている。こんなところにも、というような辺境の小さな街にもあつたりする。「スリランカ全レスト・ハウス泊まり歩き」というテーマ旅行も面白そうだ。

とつておきはアヌラーダプラの遺跡公園内の白いレスト・ハウス。道に迷うほどの深い遺跡の森の真ん中、うっそうと枝を広げた大樹に囲まれて建っている。夜には狸や狐などが出るが、さすがに象はいない。客室は広いが、部屋数は多くない。すぐ満室になるので予約してから出かけよう。コロomboの連絡所に電話で予約できる。

アヌラーダプラにはもうひとつレスト・ハウスがある。旧市街の南の町外れ、海のように広い溜め池の近くにある。静かな場所にあるうえ、プールまである。ロビーの落ちつきもなかなかのものだ。日本人客が訪れると、空いていれば「一番眺めのよい部屋」に案内されるだろう。プールのある中庭を見下ろす二階の一二B号室。部屋番号に注意すれば、両隣には一二号室と一四号室がある。つまり、もとは一三号室だったと理解できる。欧米人が避ける部屋番号だ。しかし、日本人なら気にしない。

ところで、アヌラーダプラにあるふたつのレスト・ハウスは同じ経営者となっている。公営が基本のレスト・ハウスのなかでいち早く民営化された。スリランカの謎のひとつだ。

レジデント・デイスカウント・プリーズ

スリランカは経済自由化に向かつてはいるが、基本的にはいまだ社会主義の国である。旅行者にとつて社会主義とは何か。それは、外国人用特別料金制度が存在することだ。割引料金なら良いのだが、社会主義の国では割高料金となつてゐる。中国ほど極端な料金差はないが、スリランカでもしつかりとこの制度が生きてゐる。シーギリヤ・ロックでもキャンデイの博物館でも、一般市民用と較べればアツと驚く格差の入場料を求められる。その差は三〇〜五〇倍。それでも安いと氣にならない観光客はえらいと思う。

旅慣れたひとは「レジデント・デイスカウント」の利用を試みる。うまくいけばホテルの宿泊料金も大幅に安くなる、こともある。本来、レジデント料金は六カ月以上の滞在査証をもつ外国人にしか適用されない。が、そこはフレキシビリティの国である。融通がきくこともある。笑顔が通じるとお互いにうれしくなるといふものだ。

料金割引を受けるのに英文の学生証や身分証明書が役に立つかもしれない。何よりの「小道具」は、シンハラ語だ。外国人の旅行者からシンハラ語を聞けば、それだけでスリランカ人の顔から笑顔があふれてくる。旅人のシンハラ語の会話は現地の彼や彼女を幸福にさせる。シンハラ語で家族や友人がコロンボに住んでゐるといえば、さらに納得してくれる。が、無理はいわないこと。論争や声を荒らげた会話は好まれない。あくまでも穏やかに語り、笑顔をたやさぬこと。安く、楽しく、安全に旅をするのに、シンハラ語はとても役にたつ。